

「難波大道(なにわだいどう)」とは

「難波大道」は、難波宮から南に直進する古代の官道です。河内と大和を東西に結ぶ大津道(おおつみち)・丹比道(たじびみち)につながり、横大路(よこおおじ)を経て、下ツ道、中ツ道、上ツ道等により飛鳥藤原京・平城京につながっていたと考えられます。

実はこの難波大道は、長い年月のなかで、本来の場所や名前さえ忘れ去られていましたが、昭和45(1970)年になって、岸俊男・足利健亮両氏によりその存在が推定されました。果たして昭和55(1980)年、大和川今池遺跡の発掘調査において、約18m間隔で平行する2本の溝が検出されました。溝に挟まれた部分は人為的に整地がなされており、その中心線を北に伸ばしたところ、難波宮の中軸線と一致することが判明しました。日本書紀の推古天皇二十一年(613年)十一月条に「……難波より京に至るまでに大道を置く。」という記述があることなどから、後に「難波大道」という名称が付けられました。

現在でも大阪市天王寺区には、難波大道復元ルート隣接地に「大道」の地名が残っています(右図赤丸囲み参照)。

この難波宮から一直線に南下する難波大道の復元ルートは、古くは摂津と河内の国境となっていました。現在では住吉区と東住吉区、堺市と松原市の境界となっています。

このように、現在に至るまで難波大道は境界として踏襲され続けていると言えます。

